

デザイナーのための経済コラム(24)

レトリック(paradigm shift)または修辞について

<https://ja.wikipedia.org/wiki/修辞学>

「物は言いよう、考えよう」、「嘘も方便」、「嘘から出た眞」、「嘘つきは泥棒の始まり」という表現があります。諺にはきまって反対のものがあります。レトリック・修辞とはまさにこのことだと思っています。嘘が絶対悪とされるキリスト教社会にも、調べてみると、

「It depends on how you put it.」、「It's (all) a matter of how you look at it.」

「A lie is often expedient.」、「a truth born out of a lie」 というのがありました。

レトリック・修辞学というのはギリシヤで弁論術として意識され、政治家の弁論技術として発展したようです。それらの歴史の中に、名せりふも沢山あります。ことわざにもなったりします。それらの手法、テクニック、方法を一番利用しているのは、政治家、宗教家、小説家、詐欺師。気がついていないようで使っているのは音楽家、画家、彫刻家、建築家など造形、創造的な仕事をしている人たちだと思えます。

「来たり、見たり、勝てり」、「ブルータスお前もか」、「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」
「人民による、人民のための、人民の政治」、「国があなたのために何をしてくれるのかを問うのではなく、あなたが国のために何を成すことができるのかを問うて欲しい」

長いせりふで有名なのは歌舞伎の「白波五人男」の弁天小僧の

「知らざあ言つて聞かせやしよう 浜の真砂と五右衛門が歌に残せし盗人の、種は尽きねえ七里ヶ浜、その白浪の夜働き、以前を言やあ江ノ島で、年季勤めの稚児が淵、百味講で散らす蒔き金をあてに小皿の一文字、百が二百と賽銭の、くすね銭せえ段々に、悪事はのぼる上の宮、岩本院で講中の、枕捜しも度重なり、お手長講と札付きに、とうとう島を追い出され、それから若衆の美人局、ここやかしこの寺島で、小耳に聞いた爺さんの、似ぬ声色でこゆすりたかり名せえゆかりの弁天小僧菊之助たあ俺がことだあ」

経済の分野では、多様な経済用語を使って、指示し、指示され、議論し、コミュニケーションを取っています。金利、収支、投資、融資、成長率、貿易収支、外国為替相場などなど。新しい概念がでてくると、それに名前をつけて、経済活動表現を変えています。使い古された概念、言葉、思想だけでは、新しい時代を作り出すことはできないと思えます。

レトリック・修辞の手法とは、言葉の強調、反復、隠喩、比喩が代表的なものですが、間の取り方、早口、声の強弱など、政治家、文筆家は工夫をしています。

音楽家では作曲手法、演奏手法、編曲手法、歌唱法などがレトリック・修辞として読み取れます(聞き取れます)。中世のポリフォニー聖歌合唱、バッハの対位法、交響曲の作曲(ソネット)、ジャズの即興性、演奏・歌唱のビブラートなどなど。

画家、彫刻家のモチーフ(テーマ)、使用材料、構図、プロポーション、制作工程・手法などなど。建築分野では様々な様式が作られてきました。それらの様式はまさにレトリック・修辞そのものと言えます。近代建築は新しい建築のレトリック・修辞を作り出しました。それは言葉を伴って世の中に出てきました。

自分の仕事をどのようにしているか、言葉で表現しているのか、どんなレトリック・修辞を使っているかを見ました。

ミス・ファンデル・ローエは「Less is more」、「God is in the detail」といい、

ルイス・サリバンは先人の「form follows materials」に続いて「form follows function」といい、

岡本太郎は「芸術は爆発だ」といい。

水戸岡鋭治は「私はデザイナーであり、作家ではない。自分の思いを挑戦する係ではない。

多くの人が希望していることを取材して正しく翻訳する。時代の「用途」「美」を重ねて、色、形、素材、使い勝手、サービスを作る係」

さて、どのような物言いをしたらいいのやら。